

## 優秀賞

いのち輝く和歌山のデザイン

和歌山県立向陽中学校 二年

吉川 綾音

四年に一度開催される一大国際イベント、万博。今年開かれた大阪・関西万国博覧会は、そのテーマである、「いのち輝く未来社会のデザイン」を感じさせる、素晴らしい博覧会であった。私は開催中の半年間で、二回夢洲を訪れ、たくさんのパビリオンを巡った。シンガポールのパビリオンでは、「ゆめ・つなぐ・みらい」がテーマになっており、夢を現実にする過程が体験できた。三菱未来館では、いのちの「はじまり」「ひろがり」「これから」を、バーティカルシャトルという乗り物に乗り、体験した。たくさんのパビリオンを見たが、どのパビリオンでも「今を未来に繋げる」という一つのメッセージを伝えていると感じた。

今の和歌山県は、日本の中でも知名度が低く、人口も減少の一途を辿っている。だから、「いのち輝く未来社会のデザイン」を和歌山県で実現するために、万博で公開・使用された技術を活かして、県を活性化させていくべきだと思う。私が万博の技術で県内で活用できると考えているものは、三つある。一つ目は、万博会場内で利用された自動翻訳システム。現在の和歌山県では、インバウンドで日本に来る外国人の観光客が増加しているのに対し、多言語でのコミュニケーションが取りづらい状態になっている。そこに自動翻訳システムを導入すれば、多言語の使用が可能になり、外国人観光客にもより和歌山県を楽しんでもらえるように、県の魅力をアピールできるだろう。二つ目は、一時期話題になった、空飛ぶクルマ。この車の走行には道路が必要ないため、地上の混雑状況に関わらず、スムーズに運転ができる。これは、公共交通機関が運転見合わせになった場合に代替輸送をしたり、タクシーの代わりとして使うことが

できると考える。また、災害時、目的地への移動が困難な場合でも、空を飛んで被災者の救助に向かったり、避難所に物資を運んだりできるだろう。三つ目は、IoT技術。これは、あらゆるものをインターネットに繋げ、それらを自動で制御できるようにする技術だ。この技術は、農業で活用できると考える。すでに導入して、作業が効率よくなった、という話も聞くが、まだ全ての農家の方が導入しているわけではない。現状、日本の農業従事者の高齢化が問題となっており、和歌山県もその例外ではない。そこにIoT技術を導入すれば、農家の方の負担が減り、より効率よく作物が生産できるようになり、県の農業が活性化すると考える。

今の和歌山県には、様々な課題がある。万博で公開された最先端の技術を活かすことで、その課題を解決し、よりよい未来社会を築くことができるだろう。